

第8回ブロンテ大会報告

樋口陽子

The 8th Brontë Conference は、リーズ大学 Fairbairn House にて、1983年8月1日より6日まで開催された。今回の主なテーマは Emily Brontë である。唯一の小説 *Wuthering Heights* を中心に、詩、小女期の物語、父 Patrick Brontë、姉 Charlotte、兄 Branwell、妹 Anne などを含め、広範な講演及び研究発表がなされた。参加者は、イギリスのほか、アメリカ、カナダ、フランス、ドイツ、スペイン、ポルトガル、ベルギー、デンマーク、北アイルランド共和国などから約 37 人。日本からは 甲南大学の清原良正先生と学習院大学の児玉久雄先生との 3 名であった。

8月1日午後5時より登録。6時30分より sherry reception。7時より dinner。8時より早速講演が始まった。

8月1日(月)

20:00 Introductory Lecture: "Emily Brontë and the Heights of Narrative Art" (リーズ大学名誉教授 Douglas Jefferson 氏)

Emily Brontë の小説の語り口の手法について、以下のように章を追って解説。特に2人の語り手 Nelly と Lockwood の役割や効果に重点を置いた講演であった。また Heathcliff と Nelly, Young Cathy と Lockwood とのかかわり合いにも触れられていた。

1. Chaps. 1~3. 語り手のある場所への訪問で始まる。Wordsworth の "Michael" と同じである。Lockwood は Nelly から *Wuthering Heights* の話を聞く。Chap. 2 の Lockwood が *Wuthering Heights* を訪れる箇所は

tragedy と black comedy の混じ合ったものである。Chaps. 1 & 2 は、うまい導入部になっている。

2. Chap. 4. Nelly の語り。Nelly は Lockwood に Heathcliff の説明をするが、これは negative なものである。若い Heathcliff は重病の床にあり、Nelly に依存している。Heathcliff と Nelly の間に一種の愛情が存在する。

3. Chap. 7. Heathcliff は friend を必要としている。Nelly は Cathy が帰ってくる前に、Heathcliff を小綺麗にしてやる。

4. Chap. 8. Cathy は emotional confusion に陥っている。

5. Chap. 9. Cathy が結婚の選択を迫られる最も胸を打つ章である。Linton は country squire で、normal な人間であるが、一方の Heathcliff は捨子で、非常に savage である。Cathy が自然（荒野）を彷徨い歩くことに喜びを見出すのは、Heathcliff と分かち難い関係がある。Cathy の選択は、inconsistent and false であった。

6. Chap. 16. Lockwood が Young Cathy に興味を持つ。

語り手を小説の中に登用することは、Emily Brontë の技巧の一つである。小説のこのような技巧面が論議されるようになったのは、比較的新しく、Henry James 以降である。というのは、realistic fiction は、幻覚的なものや超自然物に頼れなくなったからである。Cathy が Nelly に夢の話をする時、（これは伝統的写実主義小説の枠からはみ出しているのだが。）Nelly は “folly and nonsense”（愚にもつかぬ馬鹿げたこと）と一笑に付する。このような技巧を用いる点で、Emily は romantic authors に似ており、Shakespeare's sister と言われる所以である。独創性の上で romantic なのであり、それゆえ、romantic novels に貢献したと言えよう。

40 年間にわたる時間的経過の中での登場人物の数は少ない。

Nelly は小説の presiding spirit である。Heathcliff の奇妙な告白は、Nelly によって立聞きされる。（この独白には、*Mabeth* や *King Lear* からの conventional dialogues が ふんだんに盛り込まれている。）

Shakespeare の時代には、ghost はごく当たり前であった。18 世紀の科学の

時代, 19世紀の道徳と社会学の時代に入り, ghost, vampire, Doppelgängerなどは inferior genre に属するものと見なされるようになってしまった。ただし, dream が認められているのは, 扱い易いからであろう。Chap. 29 で, Heathcliff が, “She has disturbed me.” と言って墓を発ぐところは, ユーモア感さえ漂う。

Emily の grasp of tragedy は視覚的側面に限られている。 (以上)

次に講演後, 聴衆との間に質疑応答があり, 要点を記す。

1) 話の種に関しては, scenes には Gothic literature の影響が認められるが, source 自体はないと思う。

2) Emily は intensity と relief の作り方が上手である。

3) Linton は physical weakness が弱点である。

4) Nelly には mythological force があって, それが人々を結びつけているように見える。理由は, 次のようである。

○長年の生活体験があり, 皆が頼るから。

○Wuthering Heights という小説世界に所属しているから。

○multi-purpose character であるから。

○recipient of extraordinary experiences であるから。

5) Nelly の役割

① 登場人物として, servant であり同時に confidante として, 重要な登場人物に個人的に接近できる。

② 登場人物として, 全ての出来事の目撃者である。

③ 語り手として, 不適切。

この①+②と③との対照が著しい。

6) この小説を家具の歴史の研究に用いる研究者もある。

8月2日(火)

9:00~10:30 “Prospect, Refuge and Hazard in the Brontë Country

and in the Landscape of *Wuthering Heights*” と題する講演。(ハル大学教授 Jay Appleton 氏: 地理学)

Charlotte の *Wuthering Heights* への序文に触れた後, idealised landscapes が geographical phenomena を表わすのではなくて, mood and feelings を表わすことによって symbolism となっていること, この landscape symbolism は 18 世紀の最後の 10 年間に始まったことの指摘.

Charles Darwin の「種の起源」(1859) によれば, 動物は与えられた環境の中で, 生き残れるように行動を適合させてゆくわけであるが, その方法は physical, anatomical and behavioural である. 生存には skill を用いなくてはならないが, それには生得 (innate, inborn) の breathing のようなものと, 学んで身につける (learned, acquired) talking や walking のようなものがある.

それぞれの個は, 生き残るのに都合のよい生き方を選ぶわけであるが, 生存の可能性は, 次のようなものに支配される.

食物, 水, 日や寒さをよける陰.

鹿などならば牡の性衝動, 人間ならば親しい人々に好かれ, 受入れられたいという気持.

危険を速やかに察知し, また適切に対処できる能力. これには決断力が必要である. Konrad Lorenz は, “seeing without seeing” の大切さを述べている.

環境に受容された者は, 生存者として成功するし, 探険家としてもうまくゆく.

さて, prospect とは, 遠い水平線で, 特定の地点(木立で隠された橋のこともある)から観察できる最も遠い限界を言う. refuge は, 小屋, 森などのように反復される物や塔など. hazard からの隠れ家である. hazard は danger と言ってもよく, 動物, 昆虫や無生物の大雷雨, 落石, 滝, 嵐などであり, この危険をなくすことが生き残るために必要なのである. そして, 危険を察知する能力を持っていることを知ることが満足感を生む.

Brontë の荒野は, 荒い砂岩でできた約 1,500 フィートの高原で, ゆるやか

な凸状をなし、refuge がない。もし、谷や溪谷、峡谷、木陰などがあれば、それらが refuge symbols になるのだが、そのようなものは少ない。

Wuthering Heights の問題.

Cathy と Linton の夫婦は、近親に受入れられたいという biological desire は同じなのだが、2人の興味は一致しない。David Cecil 卿によれば、landscape symbolism は特定の人物と結びついている。たとえば、嵐と Earnshaw 一家、居心地よい家(つまり refuge を表わす Thrashcross Grange) と Linton 一家というふうに。そして、fir trees, crooked firs, dwarf apple trees など象徴である。かつ、Wuthering Heights 自身が refuge であり、Heathcliff の象徴であり、中世の城の refuge symbol でもある。荒野の中で隔離された暖かい Thrashcross Grange と、prospect symbol としての horizon に囲まれた Wuthering Heights のコントラストがおもしろい。荒野の hazard とは、目印になるものが消えて見えなくなることである。Heathcliff と Cathy にとっては Wuthering Heights は refuge である。

Emily Brontë は countermechanism of Christianity を表明していると言える。彼女が厳しい牧師の家から逃れる方法は2つあった。

1. 自然の中へ。自然には、荒野という広漠とした prospect や、溪谷という refuge や、岩や水という hazard がある。

2. 想像の世界の中へ。これは、リビドーという動因。ペンネームを男性名にしたこと、スキャンダルを避けるために語り手 (Lockwood と Nelly) を用いたこと、及び “I am Heathcliff.” という言い方 (男性との同一視) などに表わされている。

refuge も hazard もほとんど常に ambivalent である。ということは、状況 (気分、天候) などによって、同一人物にとって同一物が相反する refuge になったり hazard になったりしうることである。この ambivalent であるということは、非常に stimulating なのである。そして満足感の根源は、これらのことを認知するという行為の中にあり、それは18世紀の “sublime” (崇高) と等しい。

10 : 30 コーヒーブレイク

11 : 00~12 : 30 “Life in Haworth Parsonage” (Course Director, リーズ大学講師 Brian Wilks 氏)

父 Brontë や Arthur Bell Nicholls の教育に対する関心についての講演。

1832年に Black Bull で音楽会が催された。その際、Arthur Bell Nicholls が子供達に、「神のことを聞いたことがあるか」と尋ねたところ、“Nay”と答えたので、大いに教育を憂えた。

1844年、14才の少年 Feather を Cambridge 大学へ推薦する推薦状にも、また William Weightman への monument にも、父 Brontë の教育の重要性に対する深い関心がうかがえる。

姉妹は Protestant として、words を重視する教育を受けてきたので、Brussels へ行って Catholic の vestibule を見て大変驚いた。

John Martin の絵は、子供時代、彼女達に強い印象を与えたものであるが、Newcastle の museum には Edinburgh の岩から人々が転落して暗い淵にひしめいている hazard conscious の絵がある。

1832年に父 Brontë は Haworth における学校開校の請願を提出しており、1844年、1846年、1848年には、Arthur Bell Nicholls による同様の要請の手紙が書かれている。

14 : 00 “For Better For Worse—Linton Heathcliff” と題する研究発表。(サヴォイ大学 Judith Bates 博士) レジメに添って、主として Linton Heathcliff について。

Catherine と Edgar の結婚も、Isabella と Heathcliff の結婚も mock marriage であった。Heathcliff は Linton 家を degrade するために Isabella と結婚したのであるし、Catherine の infidelity を責めもする。Isabella の abhorrence は reciprocal hatred という結果になり、息子 Linton Heathcliff は loveless child である。つまり、unloved and unloving である。Isabella が生きていて、彼を育てることができたら、どうであっただろうか。

初版の1847年、(pre-Darwinism), Emily の心理的印象は病気や死といった

ものであった。Emily の関心は悪の問題に向けられていたと思える。

15:00~19:00 free afternoon

児玉先生と Wakefield の町へ。この町は Goldsmith の *The Vicar of Wakefield* の舞台になった。また中世に miracle play 発祥の地とも聞く。(しかし miracle play のアメリカの研究者 Clifford Davidson 博士によれば、異論もある由。) 表通りは、他の町とさして変わらない。小さな博物館には、古い道具類と剥製の動物類が少々。市役所、教会などを通ってみた。

20:00 “The Old Woolcomber and the Work House Doctor—Haworth and Its Forgotten Writers of the Brontë Era” という講演。(Keighley のカーネギー図書館々員 Ian Dewhirst 氏。) 資料のレジメあり。

Dr. John Milligan (Union Surgeon) の “Factory Labour and Wool Combing Considered in Relation to Health and Mortality” (1847) と題する講演に基づいて、紡績工場で働く女工達の悲惨な衛生状態について。(この医師は、社会悪に関する詩も書いている。)

19世紀初頭、Haworth の人口は2,600であった。Brontë の時代の平均寿命は25.8歳。gentry 階級が39歳、農家が32歳、商家が23歳であるのに対して、羊毛のすき手とその家族は18才、(Bradford では16歳)である。Haworth における乳児死亡率は41%に上った。Dewhirst 氏は休まず、倦むことなく Yorkshire 訛りの熱弁を振われた。この地域の生字引である。Dr. Milligan の貧困と病気に関する講演原稿のコピーを、後に送って頂いた。

8月3日(水)

9:00 “The Poet in Action: Watching Emily Brontë Write Her Poems” という講演。(ウォルヴァーハンプトン・ポリテクニク 上級講師 Edward Chitham 氏) レジメあり。

1837 Gondal.

No juvenile writings, no juvenilia.

1836 現存の古い MS.

1839年10月～12月. Law Hill School (topography of *Wuthering Heights*)

1月. D4-Hatfield Edition と言われる詩のまとめを始めた. 父 Brontë の影響で、紙の細片に書く. 現在、British Museum に保存してある.

1840～43. ベルギー滞在の間は、詩はほとんど書かれなかった.

1844年2月. これらの詩を集めた. Hatfield—B として、British Museum のショーケースに納められている.

1844～48. *Gondal Poems*.

Hatfield—A. raw MS.

1844. *Gondal* 及び non-*Gondal* という2つの話を書き始めた.

1847. (Emily 21歳)

‘Come, walk with me; there’s only thee,
To bless my spirit now.’

で始まる詩の音楽性や、ユーモアへの願いなどについても触れられた.

Emily の詩の考えは、Coleridge や Shelley のそれと類似している.

講演の間に、草稿のコピーを見ながら、読み辛い手稿を解説したり、Emily が居間のどの辺りに坐って詩を書いていたか図示して説明したりなされた.

詩を読むと天候もわかる. たとえば1837年の“Redbreast Poem”には“*A bleak November’s calm*”という句がある.

一つの詩に、いくつかの *valiants* がある. たとえば、*haggard cheek* を *waste cheek* に、更に *hollow cheek* に変えるように推敲を重ねている. 次第に詩に自信を持ってきた. これらを Charlotte が見つけ、編さん、出版することになる.

1846年1月～9月. *Wuthering Heights* の書かれる間、詩は1編も書かれず、以前に書かれた詩の改訂もなされなかった.

11:00より Haworth へ日帰りバス旅行.

Halifax で Shibden Hall へ. この家の地理的關係は、Thrashcross Grange に当たるとされている.(High Sunderland が *Wuthering Heights* に対応する.) 現

在は民俗博物館として公開されている。芝生の広い前庭を持ち、広々としたヨークシャー高原を背景にした15世紀及び17—18世紀の建物の結合した農家で、農器具、木底靴、樽などを展示し、室内もよく保存されている。19世紀のバーが付属している。

Haworth へ着く。1832年にCharlotteが教えた学校の前を通り、牧師館と隣接の博物館を見学。清原先生が、教会内部を御案内下さり、壁面に掲げられたBrontë Familyの納骨堂のパネル、床にはめ込まれたEmily Jane Brontëの墓銘碑など、前回(7月12日)に見そびれたものを教えて頂いた。また、前回行きそびれた墓地では、Tabitha AykroydやMary Brownのお墓へ案内して頂いた。

18:00 Brian Wilks氏のreadings。当時の新聞などから、Brontë関係の記事をいくつか読んでくださった。

19:30 Old White Lion Hotelにて夕食。その後リーズへ戻った。

8月4日(木)

9:00 “Literary Tradition Revealed in the Works of Emily Brontë”
という研究発表。(ワルシャワ大学講師Małgorzata Trebisz氏)レジメあり。

Emilyは1842~45に最良の詩を書いた。彼女はShelleyのように永遠なるものの存在を信じていたようである。

Emilyの詩は2つの系統を引く。

1. Romantic tradition. Byron & Shelley (death), Keats & Wordsworth (images), Tennysonなど。(Blakeは彼女にとってdubiousであった。)Swedenborgの不可知論を父Brontëは知っていたらしいが、確かなことはわからない。

2. Medieval convention. Gondalに多く見られるromance, ballad, Gothic element, war sagaなど。*Wuthering Heights*の窓を叩く箇所は、Gothic elementと言える。

終わって、Mr. Wilksから、Ossianの例があるとなお良かったであろうという講評。

9 : 45 “Women Place in *Wuthering Heights*: Cathy Earnshaw and the Subversion of Nature/Culture Dichotomy in Relation to Gender” という研究発表。(ポルトガルの Graca Abranches 教授)

Catherine Earnshaw の physical, social and symbolic states について。Old Earnshaw は権威を, Hindley Earnshaw は社会の権力を表わしている。作者は dichotomy で symbol と metaphor を書き分けている。

19世紀という scientific and pseudoscientific age に、女性が determinism に傾いたこと。女性は、より迷信深く、感情に負け易く、nature により近いと思われていた。ところが Heathcliff は Frankenstein や steam engine という怪物との連想があり、自然の中へ出てゆき、自然と結びついた。また彼は読書など決してせず、culture とは結びつかないのに反して、Cathy は読書もすれば手紙も書き、Hareton の教育もするという点で、性による「自然」と「文化」の役割分担が逆転した。女性は a dutiful daughter or a dutiful wife としての地位しか認められなかったので、Cathy は Heathcliff を通してのみ自然とのつながりを持つことができ、自然と自己を同一視することができた。しかし彼女は死ぬことによって母たることを拒んだ。

Heathcliff には identity に問題がある。Cathy は “I am Heathcliff.” と identity を示すが、これは historical and mystical なものである。彼女が Heathcliff 及び自然と、自己を同じものであると見なすことは、Heathcliff を通して自然への郷愁を抱くことにほかならないのであって、“Heathcliff is my home.” という言葉にも、それは示されている。ところで、“house” は refuge であり、自分の熟知する安全な場所であると同時に、そこから出て行かねばならない所でもある。作者 Emily 自身は the mistress of a house であったことは一度もない。

自然と文化との dichotomy については述べたが、自然は人間と、また男性は女性、未開人、黒人、労働者等と、dichotomy の関係にある。

10 : 30 コーヒーブレイク

11 : 00 “A Fine Red Fire: Moral Responsibility in *Wuthering Heights*”

(オンタリオ大学 A.G. Bishop) 博士) という研究発表。

Wuthering Heights に関する批評家の反応の提示。

G.H. Lewes は “baffling.”

David Cecil 卿は “amoral.” 発表者の見解では、Emily Brontë はヴィクトリア朝の道徳観からみると premoral.

Van Ghent は「善悪で判断できない。」

批評家は人間行動の constant moral analysis を迫られている。Emily 自身は「道徳以前の存在」であって、小説の中で、ヴィクトリア朝の当時も、そして現在もなお、unique moral analysis を行っている。

Nelly も Lockwood も moral を追求する。Lockwood は moral responsibilities を追求するし、Nelly は moral tutor である。moral とは、常に「これで良いのか」と問い続けることである。Nelly は冥想し、「誰がこの全ての苦しみの責任を負うのか？」と問いかけ、真実を性急に求めるのだが、ついに、「キャシーはあの世で幸福だ」という結論を出し、Lockwood を驚かせてしまう。

11:45 “Solitude and Loneliness in Emily Brontë” という研究発表。
(マドリッド大学 Rosa Castillo 博士)

まず “solitude” を「一人である状態」，“loneliness” を「仲間を望むこと」と定義。meditation のために solitude の必要であった Emily の場合，“solitude” と “loneliness” は同じではない。“alone,” “lone,” “loneliness” などの語の頻用されている詩 10 篇を引用し、Wordsworth の “The Daffodils” や “Lucy Gray” と比較しつつ解説。

14:00 “Reading Heathcliff” という研究発表。(ユタ大学教授 Larry H. Peer 氏) (確かに出席していたのだが、なぜか全くノートが取ってない。)

14:45~18:30 free afternoon

リーズの町へ出て、何軒か Austics を見て廻った。Virago Press のもの、Emma Tennant のもの 3 冊などを求めた。

19:30 St. James’s University Teaching Hospital Chapel にて、音楽と

朗読の夕べ。朗読は作家兼ラジオキャスターの Joan Bakewell 女史。曲目はブロンテ時代のもので、指揮：Alan Cuckston,フルート：Julia Crowder, ソプラノ：Charmaine Forrest, 合唱：Alan Cuckston 合唱団。Mr. Wilks も、少年時代は聖歌隊員だったそうで、お歌いになった。ヘンデルやメンデルスゾーンを含み、14 曲あった。中で、Branwell Brontë のフルート曲は、実にすばらしく、素人少年の作曲とは思えない美しい旋律であった。彼が詩文や絵に秀でていたことは知っていたが、このような作曲まで試みたことは知らなかった。才能ある若者が、挫折したことは、彼の家族のみならず、後世の遙か日本でブロンテ一家を学ぶ者の心から悼むところである。ステンドグラスから多彩な光がこぼれ、(サマータイムでもあり、日没は午後9時半頃なので) 交互になされた詩の魅力的な朗読と音楽は最高の entertainment で、壮重なオルガンさえも、私共を refresh してくれた。

Branwell Brontë のフルート曲の楽譜は、後日、ケンブリッジの楽譜店で入手した。手書きのコピーをまとめたもので、伴奏譜はついていない。

8月5日(金)

9:00 “Dismayed by Life: The Brontës’ Uses of Childhood to Portray Social Ills and Inequities” という研究発表。(テキサスキリスト教大学教授 Keith Odom 氏)

The Brontë Sisters が子供に対して dissatisfaction を抱いていたことは *Jane Eyre* などに見られる。女性は、持参金があるか美人であるかでない、結婚はできない時代で、世間では、富と社会的地位を愛情や性格や信条より評価したのであったが、姉妹が世間とは逆に、後者を重んじたことは、Anne Brontë の *Agnes Grey* や *The Tenant of Wildfell Hall* にも明らかである。Charlotte の *Shirley* には、Mrs. Simpson (Shirley のいとこ) についての批判があり、女兒の教育には、originality (独創性) と inspiration (靈感) と flexibility (柔軟性) の必要が示唆される。Charlotte は、当世風の学校は、女兒に、上のような教育を与えないと考えた。のみならず、彼女は、男児にも適

切な教育が必要であることを痛感していた。 *Jane Eyre* の John Reed の性格や行動や、弟 Branwell の自己抑制力に欠ける致命的欠陥が、教育の不備に原因が求められると思ったのである。

Wuthering Heights で、Heathcliff は、上の階級への上昇手段として教育を捉えている。彼がいくら富を得ても、Linton の生まれの良さにはかなわないのであるが、教育を受けることによって、僅かに差を縮めることができる考えたのである。Hareton も教育は不十分である。お金の力が彼の体面を保っている。Cathy と Hareton は、しばらく結婚し、その後離婚するであろう。

Brontë Sisters の小説の子供達は、社会の不正を反映しており、彼女達の dismay を表わしている。

9 : 50 “Wild Words of an Ancient Song : Emily Brontë As ‘Revisionary’ Myth Maker” という研究発表。(ノースカロライナ大学教授 Mary K. deShazer 氏)

Emily はいかなる流儀で ancient myth を彼女流に変えたか。

1) Classical Method

Gondal の AGA はバイロンの英雄の女性版で、tantalizing female である。さて、彼女はまた Muse でもある。(Women poets は Male Muse を evocation する。) 受身の人物ではなく、内に光るものを持っているのである。

2) Romantic Method

mother nature (母性) は、romantic imagination の投影の補完物である。female nature が female poet に必要であるとは限らない。Emily は、Wordsworth 的 femalized nature を拒み、Byron 的 masculine nature を取った。バイロンの英雄は sardonic であり、sinner であるが、Brontë の主人公達も同様で、*Angria* の Wellesley や、*Wuthering Heights* の Heathcliff が挙げられる。

3) “The Angel in the House”

Coventry Patmore の同題の詩では、妻の virtue と夫の glories が讃えられるのだが、Emily Brontë はこの「天使」を殺した。つまり、「母性」の最も

神聖な部分を拒否したのである。

「母」を拒否したのは、意図的なのか、それとも母を幼時に失ったためかは、不明である。

Cathy と Heathcliff は、どちらが dominate するであろうか。

10:30 コーヒーブレイク

11:00 “Beyond Equality—Emancipation in Brontë’s *Shirley*” という研究発表。(オンタリオ大学学生 Lynkaren 氏)

Shirley という作品において、作者は、unemancipated characters で emancipation とはどのような状態であるかを示している。Shirley と Caroline という2人の unemancipated characters が、成長し、完成し、emancipate されてから結婚し、幸福になる過程を描いたのがこの小説である。1848年に Emily 死し、翌1849年に Anne が没し、その3ヶ月後にこの作品は完成された。

Shirley の性格は Emily の積極的な性格と Mary Taylor とから得られ、Caroline は妹 Anne と友人 Ellen Nussey がモデルであるというのが定説であるが、Caroline も Emily の piety, modesty and honesty という性格を保有しているのである。即ち、Emily の submissiveness は Caroline に、aggressiveness は Shirley にと分け与えられ、2人合わせて whole をなす。2人の交友が続くうちに、Caroline は活動的に、Shirley は柔順に変わってゆく。emancipation の過程を経て、Shirley は Louis Moore という feminine で timid な男性と結ばれ、Caroline は Robert Moore という masculine で active な男性と結ばれる。emancipation にとって、masculinity は必ずしも必要ではない。emancipation は、社会的地位や富や教育や社会的慣習を越えたものである。Caroline は初め immature で、独身であることを歎くのであるし、一見強そうな Shirley は、はっきりした行動が起せない。2人が mature characters になり、女性として完成され、self-respect を持つようになり、社会に適應できるようになることを emancipation と言うのである。2人は互いに補完されるような男性と結婚するが、男性も emancipate されることが必要である。

Shirley は、現今では Shirley Temple のように女性名であるが、以前は男性名であった。

以上が要旨である。この発表では、emancipation の定義が通常のものとなり、自己完成を意味しているので、発表者の考え方に添わせてからでないと、論旨についてゆけない。発表が終わってから、「あなたの emancipation の意味は、通常の意味と違って、self-completion（自己完成）の意味に取れるが、そうなのでしょうか」と尋たら、諾であった。「通常 of emancipation というのと違うようだが」と尋ねたが、自分はこれでよいと思うと、彼女は頑として退かなかった。

12:00 “We Take Two and See Three Newspapers a Week” という講演。(Brian Wilks 氏)

父 Patrick Brontë は精神世界の指導者である minister であり、また世俗事の指導者でもあった。特に教育問題には深い関心を抱いており、新聞に度々投稿している。たとえば *The Guardian* に、青年が財産もなく失業状態であることを憂い、ハワースにおける貧民の教育について投書をしたり、死刑法について報告書を掲載したりした。子供達は、父の投書に対する解答を、新聞に探すのだった。父 Patrick の散文は、議論、文体ともすばらしいもので、あちこちの新聞に自ら投書したほか、Branwell の詩も投書させたり、英国王に書簡を書きさえしている。Catholic Emancipation Problem についても書いた。教育とは個人の解放であるという観点からの教育関係の投書が多い。

さて、当時の新聞の機能は、その土地の地方記事ばかり載せるのではなく、時の話題や意見を披歴する場にもなった。子供達は、書くことがお金を稼ぐことになることを知る。お金を稼ぐことの動機は liberation である。“The pen will liberate you.” ということである。Sir Kay Shuttleworth の言葉によれば、父ブロンテ師は、よい教育者の好例なのであった。

Haworth には、*The Leeds Mercury* や *The Leeds Intelligencer* や *The Halifax Guardian* などの諸紙があり、父は *The Leeds Mercury* の新聞講

読会を設け、英国における労働者の歴史について読んだり、*The Leeds Intelligencer* で、刑法について論じたりしている。

新聞は、子供達にとって、教育上の刺戟を与える中心的存在であったのである。

14:00 討論。議題は“Master and Mistress: Slave and Servitude in *Wuthering Heights*.” 司会は Wilks 氏。数人が発言。

Nelly 26 歳, Hindley 14 歳, Cathy 6 歳の時以来, Nelly が自分で自分を servant と述べるのは 1 回だけであり, 彼女は Hareton と Young Cathy を結婚させ, 女主人であるかのように振舞う。主人と召使いは交替し, 入り組み, かつ変化する。権力関係は複雑で, だれでもが主人になったり, 召使いになり得る。誰が権力を振うかを見ていると, *Wuthering Heights* は, さながら Shakespeare 悲劇のようでさえある。

Goethe の *Wilhelm Meister* や Schiller の *Die Räuber* の主人公達のように, *Wuthering Heights* の主人公や女主人公達は, primitive で, barbaric で non-compliant な人々である。

19 世紀の貧民に対する教育は, 「教育を与えないで放っておく」ことであった。

15:30 紅茶

16:00 討論の続き。主として moral consciousness について。

Nelly の反応は, moral consciousness を寛大に受容するが, 作者 Emily は自らを語ることはない。1848 年は社会と自然の調和の終焉の年である。Heathcliff は *King Lear* の heath と cliff の如きものである。

convention と morality について言えば Shakespeare は open morality である。Falstaff は morality を越えたものである。一方, Emily Brontë のは, closed morality であり, convention を越えたものである。Schiller の「群盗」の中の Karl は Heathcliff と似てはいないだろうか。

morality なり convention なりの枠内に納まりきらないということは, そこからはみ出す危険を孕むことである。

* * * *

期間中、何人かに、Cathy が、初めに Heathcliff と結婚したらどうであったらうか、と尋ねてみた。「良い質問だ、思いつかなかった」という答や、「あり得ない」という答えがあった。イギリス人、特に 19 世紀中葉のイギリス人にとっては、後者の答が正しいであろう。

18:00 Farewell Dinner

Guest Speaker は Brontë Society 会長。

後、歓談。

8月6日(土)大会終了

ブロンテ大会は無事終了した。イギリス、アメリカを初め、いろいろな国々からの研究者がどのような視点から考えていったかを、講演や研究発表を通して知ることができ、大変有益であった。自分の勉強不足と英語力不足を痛感したが、新しい目標もでき、意欲も湧いた。毎日共に過ごした人々と話し合ったことも貴重な体験になった。